

[講演要旨]『越後国頸城郡高田領往還破損所絵図』に見る高田大地震(1751)の 災害状況

株式会社 防災地理調査* 今村隆正・高野繁昭・角谷ひとみ・高田郁

§1. はじめに

宝暦高田大地震(M.7.0~7.4)は、宝暦元年四月二十六日丑ノ下刻(1751年5月21日午前2時過ぎ頃)、高田付近を震央として発生した歴史的な大規模地震の一つである。名立小泊をはじめとして、震源付近の山岳斜面や海岸沿いでは各地で大規模な崩壊が多数発生した。

また、この地震による災害は多数のメディアによって記録・伝承されていることも特徴的である。ここでは、その中で、西浜通りと呼ばれる北国街道に沿った日本海沿岸部の被害が克明に描かれている『越後国頸城郡高田領往還破損所絵図』について詳細に調査した結果を報告する。

§2. 『越後国頸城郡高田領往還破損所絵図』

『越後国頸城郡高田領往還破損所絵図』は、徳合から居多に至る、日本海沿岸の山崩れの状況を詳細に描いたものである。しかし、山崩れ被害の最も大きかった名立小泊は描かれていない。当時の名立小泊は、幕府直轄地であったためである。

この絵図は、兵庫県の佐野清輔氏より、昭和 63 年に上越市へ寄贈されたものである。佐野家の先祖は、高田藩榊原家の家臣の養子となって高田に来たといひ、地震の様子を実家へ知らせた際に届けたものであろう(上越市史より)。

§3. 空中写真判読及び現地調査

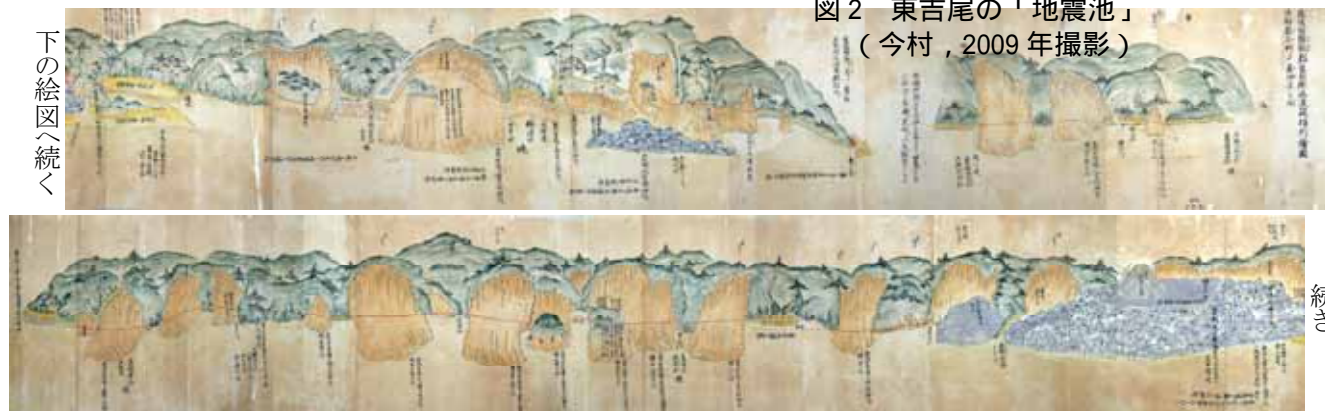
絵図に描かれている崩壊地及び解説文を基に、空中写真判読を行った。本地域には多数の地すべり地形が存在する。その中でどのブロックが宝暦高田大地震で活動したものかの正確な判断は難しいのであるが、絵図を基に現地踏査し地元伝承等の聞き取り調査を行った結果、おおよその対応をつけることができた。

虫生村の崩壊地先端部に描かれている小丘は現在も確認される。桑取で発生した崩壊と堰止めは、絵図の説明にある通り、約1km に渡って地すべり地形が連続する。これらのいくつかが同時に活動して桑取川を堰止め、地震の翌日に決壊流出したものと考えられる。また、この絵図には描かれていない桑取谷、名立谷の上流部にも、土砂災害による多くの記録が残っている。東吉野では、地すべりによって堰止められた池が現存し「地震池」と呼ばれている。



図 2 東吉尾の「地震池」
(今村, 2009 年撮影)

下の絵図へ続く



続き

図 1 『越後国頸城郡高田領往還破損所絵図』

* 〒206-0033 東京都多摩市落合 1-6-5-1004 (上越市立高田図書館所蔵)
電子メール:info@gpi-net.jp